

# 春風を たどって

「旅に 出たいなあ。」

リスの ルウは、さいきん、そんな

ことばかり 言っています。

心を うきうき させるような 春風が、

高い 木の えだに すわった ルウの

しっぽを くすぐって いきます。それなのに

ルウは、ふさふさした しっぽを

たいくつそうに ゆらしながら、たから物の

ことを 思い出して いました。



如月 かずき 作

かめおか あきこ 絵

ルウの たから物は、風の 強い 日に どこからか とばされて きた、  
たくさんの しゃしんです。しゃしんに うつつて いたのは、青く すき通った  
海に、雪を かぶった 白 一色の 山々、黄金に かがやく さばく。  
どれも ルウが 見た ことの ない、すばらしい けしきばかりでした。  
「それに くらべて、この 森の けしきってさ、ぜんぜん わくわく  
しないよね。」

見なれた けしきを ながめて、ルウは ためいきを つきます。

海や 雪山や さばくの ことを ルウに 教えて くれた、森で 一番の

もの知りリスも、それらが どこに あるのかまでは 知りませんでした。

ちっぽけな リスには たどり着く ことが できない、遠い 遠い ばしょに

あるのだろう、とも 言って いました。

「それでも ぼくは、いつか ぜったい、しゃしんの けしきを 見に

新漢字 154 ページ

登場 トウ  
のぼる

人物 ブツ  
もの モツ

気持 も  
もち

旅 たび  
たび リョ

白 一色 ショウ  
・

々

同じ 字を かさねる  
ときに つかう しるし。

「おどり字」などという。

黄金  
・

行くんだ。」

そのとき、クルル、とルウのおながが鳴りました。そろそろお昼ごはんの時間です。ルウは、みがるに地上に下りて、お昼ごはんを食べる木のみをさがし始めました。

「さいしよに行くのは、やっぱり海がいいな。なんていっても、とくべつきらきらしてきれいだもん。」

しゃしんで見た海のけしきを思いうかべながら、ルウが森の中を進んでいくと、顔見知りのノノンのすがたを見かけました。

ノノンは、とてものんびりおっとりしたりすです。目をとじたままじっとしていて、ねているのかおきているのか、分からないこともよくあります。そのせいで声をかけづらいので、ルウは、ノノンと

あまり話したことがありません。

ノノンは今日も、ねむっているように目をとじていました。ですが、よく見ると、

そのはなが、さかんにくんくんと動いています。ルウはそれが気になって、

ノノンに話しかけてみました。

「ノノン、何をしてるの。」

「わあ、びっくりした。あのね、なんだかすてきなにおいがするんだよ。」

ノノンがおっとり答えます。ルウも、ためしににおいをたしかめて、それから首をかしげました。



◦始<sup>はじ</sup>める  
シ  
はじめる

◦進<sup>すす</sup>む  
シン  
すすむ

◦動<sup>うご</sup>く  
ドウ  
うごく

◆今日<sup>きょう</sup>



「めずらしい においは、とくに しないみたいだけど。」

「においが 弱くて 分かりづらいんだよ。でも、本当に すてきな

においなんだ。たぶん、こっちの 方から して くるんじゃないかな。」

ノノン は、ガサガサと 近くの しげみに 入って いきます。少し

まよってから、ルウも、その 後に ついて いって みる ことに しました。

前が 見えないほど 深い しげみを、ルウは、草を かき分けながら

進みます。すると、そのうちに、知らない においに

気が つきました。さわやかで、ほんのりと

あまい、とても すてきな においです。

「ノノンは、こんなに かすかな においに

気づいてたんだ。」

ルウは びっくりして、ノノンの せなかを

見つめました。

しげみは、どこまでも どこまでも つづいて います。

ルウは だんだん つかれて きて しまいましたか、

前を 行く ノノンが 足を 止める けはいは

ありません。においの して くる 方へ おかって、

まっすぐに、どんどん 進んで いきます。その

様子は まるで、ルウが 知って いる いつもの

ノノンとは べつの りすのようでした。

それから どれだけ 進みつづけたのでしょうか。

しげみが やっと とぎれたかと 思うと、あざやかな

青い 色が、ルウの 目に とびこんで きました。



深い

シン  
ふかい  
ふかまる  
ふかめる

様子

ヨウ  
さま



しげみの おこうに あったのは、見わたす かぎりの  
花ばたけでした。そこに さく 花の 色は、ルウが 行きたいと  
ねがって いた、しゃしんの 海に そっくりな 青。その  
けしきの うつくしさに、ルウの 口から、ほう、と ためいきが  
こぼれました。

「すごいや。この 森に、こんな 花ばたけが あったんだね。」  
ルウは ノノンに 言いました。ところが ノノンは、ルウの  
声が 聞こえなかったかのように、うっとり 花ばたけに  
見とれて います。

そんな ノノンの 様子を ながめながら、ルウは 思いました。  
ぼく 一人だったら、この 花ばたけを 見つける ことは  
できなかっただろうな、と。

「すごいや。」

ルウは、そう くりかえして にっこりすると、だまって  
花ばたけの 方を おきました。さわやかな 花の かおりに  
つつまれて、ゆったりと 時が ながれて いきました。

しばらく たった ころに、ノノンが のんびり 言いました。  
「そろそろ お昼ごはんを さがしに 行こうかなあ。ルウは  
どう する。」

そう いえば、ぼくも ごはんが まだだった、と ルウは  
思い出しました。けれど、気づいたら、ルウは こう 答えて  
いました。

「ぼくは、もう 少し ここに いる ことに するよ。」

「分かった。じゃあ、またね。」



「うん。また話そう。」

ノノンを見おくった後で、ルウは、また花ばたけをながめました。  
やわらかな春風が、花たちとルウの毛を、さわさわとなでていきます。  
海色の花びらの上で、昼下がりの光が、きらきらかがやいて  
います。ルウのしっぽは、いつのまにか、ゆらゆらとおどるように  
ゆれて います。

花ばたけの空気を おね いっぱいに すいこんで、本物の海も こんな  
いい おいが するのかな、と ルウは そうぞうしました。

その夜、ルウは、すあなで たから物の しやしんを ながめて いました。  
きれいだなあ、いつか 行って みたいなあ、と うっとりしながら。

「だけど、あの 海色の 花ばたけも、とっても すてきだったなあ。」

ぽつりと つぶやいてから、ルウは ふと

思いつきました。

「そうだ。ぼくの 知らない すてきな ばしよが、

ほかにも まだ、近くに あるかも しれない。

あした、ノノンを さそって、いっしょに さがして

みる ことに しよう。ノノンと いっしょなら、

また あの 花ばたけみたい な けしきを、

見つけられそうな 気が するから。」

そんな ふうに 考えて わくわく しながら、

ルウが ねどこに ねそべると、花ばたけから ついて

きた さわやかな かおりが、ふわりと ルウの

はなを くすぐりました。



クウ  
• 空気

如月 かずさ

一九八三年、群馬県  
生まれ。作家。

「セミクジラのぬけがら」  
「ふたりはとっても本が  
すき！」などの  
さくひんがある。



# 文様

熊谷 博人  
くまがい ひろと

## はじめ

① 服や おさらなどには、「文様」とよばれる、いろいろな 形の 絵や 図がらが ついて います。文様の 多くには、「いい ことが ありますように。」という ねがいが こめられて います。どんな ことを ねがう 文様があるのでしょうか。

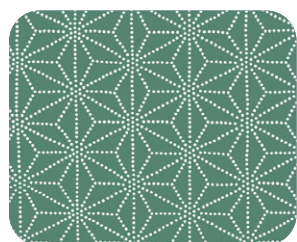


② ①の 文様は、「つるかめ」といわれる ものの 一つです。かめの こうらのような 形の 中に、 つると かめが います。つるは 千年、かめは 万年 生きると いう 言いつたえが あります。元気で 長生きを する ことを ねがう 文様です。

## 中



③ ②の 文様は、「かりがね」といいます。わたり鳥の かりが とぶ 様子を 表して います。かりは、 遠くから よい 知らせを はこんで くれる 鳥だと いわれて きました。しあわせが やって 来る ことを ねがう 文様です。



④ ③の 文様は、「あさの 葉」といいます。しよくぶつの あさの 葉に にて いるので、この 名前が つけられました。あさは、とても 生長が 早く、 すぐに 大きく なります。子どもたちが 元気で、 じょうぶに そだつ ことを ねがう 文様で、 子どもの 着物に よく 使われました。

## おわり

⑤ このように、文様には、人々の くらしから 生まれた さまざまな ねがいが こめられて います。その ことを 知ると、文様を えらんだり、みに つけたり する ことが、より 楽しく なりますね。

新漢字 156 ページ

全体 ぜんたい すべて

こま遊び こまあそび

発見 けんみ

▼「問い」に 書かれて いる ことを たしかめましょう。

▼③④段落を、「問い」の 「答え」に 当たる ぶぶんは どこかを 考えながら、 音読しましょう。

▼この 文章には、文章 全体の 「まとめ」が 書かれて いる 段落が あります。 どの 段落でしょう。

あらわす 表す

ヒヨウ おもて あらわす あらわれる

問い

160 ページ

段落

文章を 組み立てて いる まとまり。

160 ページ

熊谷 博人

一九四一年 生まれ。本の デザインなどをして いる。



# こまを 楽しむ

安藤 正樹

こまを 回して 遊ぶ ことは、昔から  
世界中で 行われて きました。長い 間、広く  
親しまれる うちに、こまには、さまざま  
くふうが つみかさねられて きました。  
そうして、たくさんの こまが 生み出されて  
きました。日本は、世界で いちばん こまの  
しゅるいが 多い 国だと いわれて います。  
では、どんな こまが あるのでしょうか。



また、どんな 楽しみ方が できるのでしょうか。  
色がわりごまは、回って いる ときの 色を  
楽しむ こまです。こまの 表面には、もようが  
えがかれて います。ひねって 回すと、  
もように 使われて いる 色が まざり合い、  
元の 色と ちがう 色に かわるのが  
とくちょうです。同じ こまでも、回す 速さに  
よって、見える 色が かわって きます。  
鳴りごまは、回って いる ときの 音を  
楽しむ こまです。こまの どうは 大きく、  
中が くうどうに なって いて、どうの 横には、  
細長い あなが 空いて います。ひもを



鳴りごま



色がわりごま



速く 回した とき



ゆっくり 回した とき



動画

横

オウ

物の、まん中の ぶぶん。  
どう

速さ

元

ソク  
はやい  
はやめる  
はやまる

行

世界中

カイ  
よ  
セイ

昔

むかし



引っぱって 回すと、あなから 風が  
入りこんで、ボーッと いう 音が 鳴ります。  
その 音から、うなりごまとも よばれて  
います。

さか立ちごまは、とちゅうから 回り方が  
かわり、その 動きを 楽しむ こまです。  
この こまは、ボールのような 丸い どうを  
して います。指で 心ぼうを つまんで、  
いきおい よく 回すと、はじめは ふつうに  
回るのですが、回って いく うちに、だんだん  
かたむいて いきます。そして、さいごは、  
さかさまに おき上がって 回ります。

たたきごまは、たたいて 回しつづける

ことを 楽しむ こまです。この こまの どうは、  
細長い 形を して います。手や ひもを  
使って 回した 後、どうの 下の ぶぶんを  
むちで たたいて、かいてんを くわえます。  
止まらないように、上手に たたいて 力を  
つたえる ことで、長く 回して 楽しめます。

曲きよくごまは、曲芸げいで 使われ、おどろくような  
所で 回して、見る 人を 楽しませる

こまです。曲ごまは、心ぼうが 鉄で できて  
いて、広く 平らな どうを して います。  
ほかの こまと くらべ、安定した つくり

さか立ちごま



たたきごま



曲ごま



指ゆび

心ぼう  
回る 物の、じくになっ  
て いる ぼう。

さす  
ゆび

曲芸

人をおどろかせたり、  
よろこばせたり する、  
めずらしい 芸。

鉄テツ

テツ

安定アンテイ

アン  
やすい

ジョウ  
さだめる  
さだまる

上手じょうず

なって いるので、あまり ゆれる ことが  
ありません。台の 上で 手を使って 回し、  
そこから 細い 糸の 上や、ぼうの 先のような  
回しにくい 所へ うつしかえて  
回しつづけます。

ずぐりは、雪の 上で 回して 楽しむ  
こまです。ふつうの こまは、心ぼうが 細いので、  
雪の 上で 回す ことは できません。  
いっぽう、ずぐりは、雪の 上で 回して 遊ぶ  
ことができるように、心ぼうの 先が  
太く、丸く 作られて います。まず、雪に  
小さな くぼみを 作り、わらで できた なわを

使って、その 中に なげ入れて 回します。  
雪が ふっても こまを 回したいと いう  
人々の 思いから、ずぐりは 長く 親しまれて  
きました。

このように、日本には、さまざまな  
しゅるいの こまが あります。それぞれ 色も  
形も ちがいますが、じくを 中心に  
バランスを とりながら 回ると いう つくりは  
同じです。人々は、この つくりにくふうを  
くわえ、回る 様子や 回し方で さまざまな  
楽しみ方の できる こまを たくさん  
生み出して きたのです。



雪の 上で 回る ずぐり



細い 糸の 上や、ぼうの 先で 回る 曲ごま

安藤 正樹  
一九五八年、鳥取県  
生まれ。こま回しなどの、  
日本の 伝承遊びの  
けんぎゅうを して  
いる。



# まいごのかぎ

斉藤 倫 作

陣崎 草子 絵

海ぞいの 町に、ぱりっとした シヤツのような  
夏の 風が ふきぬけます。だけど、  
学校帰りの 道を行く りいこは、  
うつむきがちなのです。

「また よけいな ことを しちゃったな。」

りいこは、しょんぼりと 歩きながら、  
つぶやきました。

三時間目の 図工の 時間に、みんなで 学校の まわりの 絵を かきました。

りいこは、おとうふみたい な こうしやが、なんだか さびしかったので、

その 手前に かわいい うさぎを つけ足しました。そしたら、

友だちが、くすくす わらったのです。りいこは、はずかしく なって、

あわてて 白い 絵の具を ぬって、うさぎを けしました。その とき、

りいこの 頭の中 には たしかに いた はずの うさぎまで、どこにも いなく

なった 気が したのです。うさぎに わるい ことを したなあ。思い出して

いる うちに、りいこは、どんどん うつむいて いって、さいごは 赤い

ランドセルだけが、歩いて いるように 見えました。

ふと 目に入った ガードレールの 下の あたりに、かたむきかけた

光が さしこんで います。もじやもじやした ヤブガラシの 中で、何かが、

ちらっと 光りました。



ヤブガラシ

絵の具  
グ

新漢字  
156 ページ



しゃしん

「なんだろう。」

りいこが 拾い上げると、それは、夏の 日ざしを  
すいこんだような、こがね色の かぎでした。家の かぎよりは  
大きくて、手に 持つ ほうが、しつぽみたいに くるんと まいて います。

「落とし物かな。」

そう、小さく、声に 出しました。すると、かぎは、りいこに  
まばたきするかのように 光りました。

りいこは、元気を 出して 顔を 上げました。落とした 人が、きっと  
こまって いるに ちがいない。帰り道の 方角とは べつの、海べに ある  
交番に 向かって、ゆるい 坂を 下り始めました。

坂道に ならんだ いくつもの 家を ながめながら、この かぎは、

どんな 人が 落としたのかなあと、りいこは、あれこれと

思いうかべました。

通りぞいに ある、大きな さくらの 木は、  
青々と した 葉ざくらに なって いました。

その 木の ねもとを 見て、りいこは、  
びっくりしました。

「あれは、なんだろう。なんだか  
かぎあなみたい。」

しぜんに 空いた あなでは なく、ドアの  
かぎのように 四角い 金具が、みきに  
ついて いて、その まん中に 円い あなが  
あるのです。

「もしか して、さくらの 木の 落とした



○ひろ拾い上げる  
ひろ

○む向かう  
コウ  
むく  
むける  
むかう  
むこう

○さか坂  
さか

●かな金具  
●まる円い



かぎだったりして。」

まさか、ね、と 思いながら、持っていた かぎを さしこんで みます。すると、すいこまれるように 入って いき、回すと、ガチャンと、音が しました。

「あっ。」

思わず、さけびました。木が、ぶるっと ふるえたのです。そうして、えだの 先に、みるみる たくさんの つぼみが ついて、ふくらんで いったかと 思うと、ばらばらと 何かが ふって きました。

「どんぐりだ。」

りいこは、悲鳴を 上げます。さくらの 木に、どんぐりの みが つくなんて。おさげの 頭に コンコン 当たる どんぐりを、ランドセルで ふせぎながら、

あわてて かぎを ぬきました。どんぐりの 雨は、ぴたりと やみ、さくらの 木は、はじめの 葉ざくらに もどって いました。「びっくりした。」

りいこは、道の 方に 後ずさりしながら、言いました。

「こんな ことになんて。さくらの 木の かぎじゃ なかったんだ。」

さらに 下って いくと、公園が あります。よく 遊んで いる 場所ですが、今日は、通りぬけるだけ。その ほうが、海への 近道なのです。ところが、緑色の ベンチの



みどり  
緑色

リョク  
みどり

ヒ  
メイ  
悲鳴

ヒ  
かなしい  
かなしむ

手すりに、小さな あなが 空いて いるのです。

「なんだか、あれも かぎあなに 見えるんだけど、  
そんな はず ないよね。」

りいこは、だれにとも なく つぶやいて、  
通りすぎようと します。けれど、ふと 立ち止まって  
しまいました。

「でも、もしか して――」。

カチンと かぎを 回す 音が、あたりに ひびきました。

ベンチは、四本の あしを ぐいと のばし、

大きな 犬のように、せなかを そらしました。

「わあ。」

りいこは、ひっくりかえりそうに なりました。日かげに



いた ベンチは、のそのそと 歩きだすと、公園の

まん中の 日だまりに ねそべり、その まま ねいきを

立て始めました。りいこは、びっくりして 見て

いましたが、しのびよると、かぎを ぬきとりました。

ベンチは 体を ふるわせ、りいこの 方を、なんだか

うらめしそうに ふりかえってから、元 いた

所に 帰って いきました。

「ベンチの かぎでも ないよね。歩くなんて、

おかしいもの。」

りいこは、ためいきを 一つ ついて、公園を 後に

しました。坂を 下ると、大きな 国道に ぶつかります。

その 向こうには、海が きらきらと 光って います。







交番までは、もう 少し。おうだん歩道を  
わたると しおの かおりが して  
きます。道の わきに あみが 立てて  
あり、魚の 開きが 一面に ならべて  
ありました。りょうしさんが あじの  
ひものを 作って いるのです。そばを  
通る とき、中の 一ぴきに、円い あなが  
空いて いるのに 気が つきました。  
「お魚に、かぎあななんて。」  
へんだと 思いながら、見れば  
見るほど、やはり、ただの あなでは  
なさそうです。いつしか

•歩<sup>ホ</sup>道

。開<sup>ひら</sup>き

カイ  
ひらく  
ひらく  
あける

•羽<sup>は</sup>ばたく

すいこまれるように、かぎを さしこんで いました。

カチャツ。たちまち、あじの 開きは、小さな

かもめみたいに、羽ばたき始めます。あっけに とられて

いる うちに、あじは、目の 前で ふわふわと

うかび上がりました。

りいこは、あわてて とびつき、かぎを 引きぬきました。

開きは、元の あみの 上に、ぽとりと

落ちました。

「あぶない。海に 帰っちゃう とこだった。」

わたし、やっぱり よけいな ことばかり して

しまう。りいこは、悲しく なりました。早く 交番に

とどけよう。



海岸通りを いそぎ始めた とき、ふと

バスていの かんばんが 目に入りました。

「バス」という 字の「バ」の 点が、

なぜか 三つ あるのです。その 一つが、

かぎあなに 見えました。

「どう しよう。」

りいこは まよいました。よけいな ことは

やめよう。そう 思ったばかりです。その

とき、点の 一つが、ぱちっと

またたきました。

「これで、さいごだからね。」

いつしか りいこは、かんばんの 前で



せのびを して いました。カチンと 音が

して、かぎが 回りました。ところが、何も

おこりません。

ほっと したような、がっかりしたような

気持ちで、バスの 時こく表を 見て、

りいこは「あつ。」と言いました。数字が、

ありのように、ぞろぞろ 動いて いるのです。

五時九十二分とか、四十六時八百七分とか、

とんでもない とうちやく時こくに

なっ ています。

「すごい。」

りいこは、目を かがやかせました。でも、



カイガン  
・海岸

ガン  
きし



すぐに、わくわくした自分がいやになりました。りいこは、かぎをぬきとりました。

「あれ。どうして。」

時こく表の 数字は、元には、もどりませんでした。

りいこは こわく なって、にげるように かけだしました。交番の ある

方へ すなはまを 横切ろうと、石だんを 下りかけると、国道の ずっと

向こうから、車の 音が 聞こえて きます。ふり向くと、バスが

十何台も、おだんごみたいに ぎゅうぎゅうに なって、やって 来るのです。

「わたしが、時こく表を めちゃくちゃに した せいだ。」

どう しよう。もう、交番にも 行けない。おまわりさんに しかられる。

りいこは、かぎを ぎゅっと にぎりしめて、

立ちすくんで しまいました。

きみような ことは、さらに おこりました。

つながって きた バスが、りいこの 前で

止まり、クラクションを、ファ、ファ、

ファーン、と、がっそうするように

鳴らしたのです。そして、リズムに 合わせて、

くるくると、向きや 順番<sup>じゅんぱん</sup>を かえ始めました。

りいこは、目を ぱちぱち しながら、

その ダンスに 見とれて いました。

「なんだか、とても 楽しそう。」

そして、はっと 気づいたのです。

もしかしたら、あの さくらの 木も、

楽しかったのかも しれない。どんぐりの みを



▲ファ

つけたのは、きっと 春が すぎても、みんなと 遊びたかったからなんだ。

ベンチも、たまには 公園で ねころびたいだろうし、あじだって、いちどは 青い 空を とびたかったんだ。

「みんなも、すきに 走って みたかったんだね。」

しばらくして、バスは まんぞくしたかのように、一台一台と いつもの路線に 帰って いきました。その とき、一つの まどの中に、りいこは たしかに 見たのです。図工の 時間に けして しまった、あの うさぎが、うれしそうに こちらに 手を ふって いるのを。

りいこも うれしく なって、大きく 手を ふりかえました。にぎって いた はずの かぎは、いつの まにか、かげも 形も なくなって いました。りいこは、夕日に そまりだした 空の 中で、いつまでも、その 手を ふりつづけて いました。



。路線

じロ

齊藤 倫

一九六九年、秋田県

生まれ。詩人、作家。

「せなか町から、ずっと」

「とうだい」などの

さくひんがある。





読んで みよう

109 ページで とり上げて いる 本です。あなたに  
とって、はじめて 知る ことは あるでしょうか。

# 鳥になつた

## きょうりゅうの話

おおしま えいたろう  
大島 英太郎 文・絵

あなたは、きょうりゅうの 化石を 見た  
ことが ありますか。

はくぶつ館などに ある きょうりゅうの

ほねの 化石を 見ると、わたしたちは、

その 大きさに びっくりさせられます。

こんなに 大きな 生き物たちが、本当に

いたのです。



### 化石

化石 カセキ

カ  
ばける  
ばかす

古い じだいの 生物や  
生物の 生活の あとが、  
地中に のこされた  
もの。

きょうりゅうが すんで いたのは、  
ずうっと ずうっと 大昔の ことです。その  
ころの 地球は とても あたたかくて、  
きょうりゅうたちに とっては ぐらしやすい  
所だったのです。

きょうりゅうには、植物を 食べる ものや、  
ほかの きょうりゅうを おそって 食べる  
肉食の ものなど、いろいろな しゅるいが  
いました。見た目も さまざまて、体が  
かたい うろこに おおわれて いる ものも  
いれば、ふさふさと した 羽毛が 生えて いる  
もの、その りょうほうを もつ ものも  
いました。

ところで、きょうりゅうは、みな 大きかった  
わけでは ありません。なかには、



ねこや 犬ぐらいの 大きさの きょうりゅうも  
いて、すばやく 走り回りながら、とかげや  
ねずみに いた 動物などを つかまえて  
食べて いました。これらの 小さな  
きょうりゅうたちにも、羽毛が 生えて いる  
ものが いました。

やがて それらの 中に、木の 上で ぐらす  
ものが あらわれました。木の 上なら、  
地面の 上と ちがって ときに おそわれる  
ことも 少ないし、えさと なる 虫なども  
たくさん いたからです。

これらの きょうりゅうは、体が  
かるかったので、手あしを バタバタと 動かして  
木に 登る ことが できました。

木の 上で 生活を 始めた きょうりゅうたちの  
しそんは、とても 長い 年月が たつ うちに、





木から 木へと とびうつって  
くらすようになりしました。

そして、それらの しその 中には、  
手あしに 生えて いる 羽毛が 長く のびて、  
つばさの 形に なった ものが  
あらわれたのです。

やがて、空を とべるように なった  
きょうりゅうたちは、食べ物をもとめて  
遠くまで とんで いくようになりしました。

その ころの 地球では、地上を 歩く 大きな  
きょうりゅうと、つばさの ある 小さな  
きょうりゅうとが、いっしょに えさを  
とる すがたが 見られた ことでしょう。

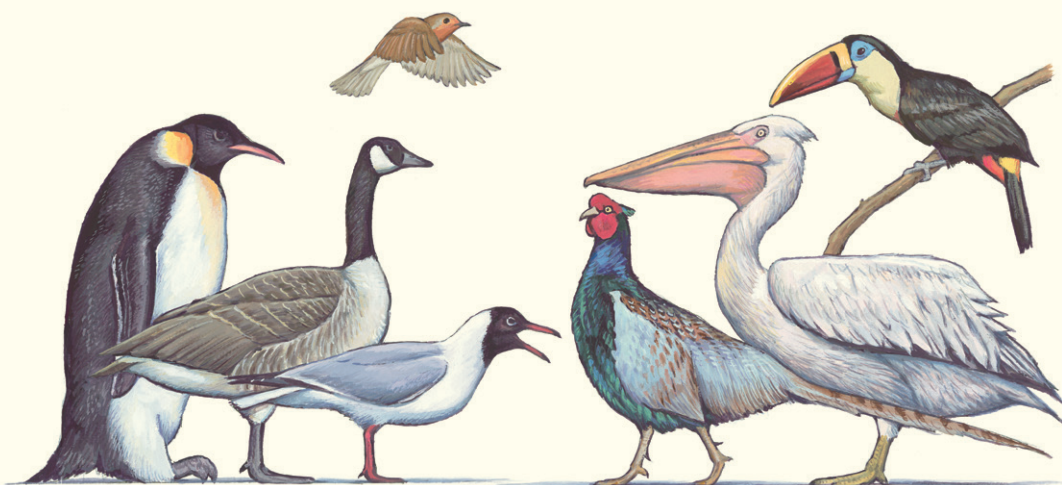
ところが、今から 六千六百万年ほど 前の  
こと、地球の 様子が 大きく かわり、



大きな きょうりゅうの なかまは ほとんど  
死にたえて しまえます。けれども、つばさを  
もち、とぶ ことの できる 小さな  
きょうりゅうの しそんだけは、生きのこりました。  
そして、これらの きょうりゅうは、  
今でも すがたを かえて 生きて いるのです。

それが 鳥なのです。鳥は、生きのこった  
きょうりゅうだったのです。

鳥と きょうりゅうとは、ずいぶん ちがって  
いるように 見えますね。でも、ほねや  
あしの つき方など 体の つくりを よく  
調べて みると、とても にて いるのです。  
大きさは どうでしょう。ほとんどの 鳥は、  
きょうりゅうより ずっと 小さな 体を  
して います。なぜ、鳥たちは、このように



死にたえる  
しぬ

小さく なったのでしょう。

それは、空を とぶには、小さくて かるい  
体の ほうが 都合が いいからです。また、  
小さければ 食べ物も 少なくて すみます。  
小さく なった 鳥は、花の みつや 草の  
たねなど、ほんの 少しの えさを 食べて 生きて  
いけるように なったのです。



ところで、鳥の 中には、とても  
うつくしい 羽毛を もつ ものも います。昔の

きょうりゅうが どんな 色を して いたのかは、  
長い 間、そうぞうするしか ありませんでした。  
しかし、手がかりが のこった 羽毛の  
化石が 見つかり、少しずつ きょうりゅうの  
色が 分かって きて います。もしか したら、  
おしどりのように 色あざやかな  
きょうりゅうも いたかも しれませんね。

昔々 大昔の 地球を 歩き回って いた  
ティラノサウルスや ブラキオサウルスなどの  
大きな きょうりゅうたちは、もう いません。  
けれども その かわり、鳥と いう 小さな  
きょうりゅうの なかまは、今も 元気に  
この 地球で 生きて いるのです。



。都合

ツ ト  
みやこ

おしどり

かもの なかまで、  
おすは うつくしい  
色の 羽を もつ。



ティラノサウルス

全長 やく

十三メートルに なる、  
大型の  
肉食きょうりゅう。

ブラキオサウルス

全長 やく

二十五メートルに なる、  
大型の  
草食きょうりゅう。

ティラノ

サウルス

大島 英太郎

一九六一年、栃木県  
生まれ。絵本作家。  
「羽毛恐竜」などの  
作品がある。